建築

第15回建築コンクール

公益社団法人愛知建築士会名古屋北支部主催

JIA 建築家大会 2023 東海 in 常滑　建築家大会ウィーク参加企画

公益社団法人
愛知建築士会 名古屋北支部

CONTENT

SYMPOSIUM

松山 将勝［建築家］……04
秋吉 浩気［建築家メタアーキテクト］……06
浅井 裕雄［建築家］……08

CONCOURS

応募作品紹介……10
最優秀賞……12
優秀賞……13
審査員賞……14
佳作……15
応募作品リスト、審査……16
総評……18
愛知建築士会会長挨拶……19
後援／協賛企業……19

ナガオカケンメイさん［デザイン活動家］は、体調不良のため欠席。シンポジウムは松山さんと秋吉さんで発表していただき、公開審査は進行の浅井さんが加わり3人で議論していきます。



松山将勝 建築家

株式会社松山建築設計室　代表
九州・福岡を拠点に全国各地で様々な設計活動を行っている。
代表作品である故郷奄美大島で手掛けた「父母の家」は、南の島特有の気候風土から着想された建築手法が国内外で高く評価され、日事連建築賞日事連会長賞、日本空間デザイン賞、住空間部門金賞を受賞。2019 年には「大屋根の棲家」で日本建築学会作品選奨。日本建築学会建築九州賞においては、過去最多となる7 度の作品賞を誇る九州を代表する建築家。
https://www.matsuyama-a.co.jp/

○現代とさよなら

経済市場主義の中で日本のどこに行っても同じような街並みが形成されてきています。
私が育った鹿児島の奄美大島でも都市化というか均一化されてきていて、拠点としている福岡の街並みとあの南の小さな島が同じような状態になりつつあると実感しています。そういったものに対して建築は大きな社会的責任があったわけですが、それが一体どこに行ってしまったのかと感じます。現代の建設プロセスと決別 (さよなら)、都市全体を思考するプロセスということを今一度考えていくべきじゃないか。そのプロセスの最後の砦となるのは建築家１人１人の活動だと信じて今でもやっています。自分たちのつくるものはある1つの小さな敷地の１区画しかないけども、そこをしっかりつくっていくことが次の世代に繋げていく、確かなものに繋げていくものと信じています。建築って要求とかつくらなくちゃいけない使命はあるのですが、もう少し街と言いますか、風景と言いますかそこに責任を持った建築をつくっていく。これがやがて大きな輪になっていくことを信じてやっています。



世界の街を観た時、街の中に入るとバラックでむちゃくちゃな個人主義な状態に見えますが、俯瞰して見るとすごく綺麗と言いますか、統一感があります。

屋根が青いだけでも美しい街並みが維持されていく、個人主義でない全体を考えた活動がそこにしっかりとある。それによって全体が形成されていくと歴史的にも繋がっていくということを感じます。我々建築家がどのように風景を読み込み、馴染むといった責任を持ってものをつくれるかが大事だと思い活動しています。

○風景が生み出す建築

・本照寺納骨堂

本照寺納骨堂



佐賀県鳥栖市

お寺というと結構広い敷地をイメージすると思うが、本照寺はかなり狭い敷地にコンパクトに形成されています。その中に本堂、庫裏、納骨堂が密度高く形成されている状況でした。オーダーではお墓を分断することになり、今まで計画もなしにつくってきたということもありました。本当にここに納骨堂をつくるべきか、つくっていいのかということから考えました。つくってくれという場所と違う場所に我々は提案をし、将来ローリング計画を立てて最終的には提案の場所に建てることに承諾いただきました。
納骨堂は 800 基のオーダーがあり、また檀家さんの使う室のオーダーもあって狭い敷地なので 3 階建てになってしまうということがありました。3 階建てになってしまうと本堂よりも高くなってしまうので、本堂と庫裏に機能を分けて、2 層にするべきという提案をしました。



どういう風に我々がこの場所に馴染む建築を考えたのだろうか?瓦が圧倒的に存在感を示している中で、外装が一番大事だと思いました。ダブルスキンで使ったモックアップをできるだけ瓦の表情に近い状態にしました。瓦の表情と外壁とが非常にマッチングして前から建っていたかのような佇まいにしています。高さも正門を抜けたときに本堂が最も象徴するような関係性を維持しています。



日本建築学会 2019年作品選奨
2017年度 日本建築学会 建築九州賞 作品賞

大屋根の棲家
長崎県佐世保市

・大屋根のすみか

長崎県佐世保にある離れ小島のような集落に住宅を建てるという計画です。集団としての意識が強く町の人たちが一緒になってやっていくような関係性の強い場所に縁もゆかりもない夫婦が飛び込んでいくというプロジェクトです。隣近所や集落の人たちが共に行動して、子育てを一緒にしていくというような関係性を持ったところに住みたいということでこの場所を選んだそうです。周辺をリサーチしたときに切妻屋根の形態になっていて、こういう場所性に我々も投資するということで切妻屋根にするということを最初に決めました。



ご主人のここに住むという思いと奥さんの不安である生活のプライバシーが見えない形を予算の中でつくるということで、半地下に埋めるということを思いつきました。半地下に埋めることである程度視線を制御できます。北側の隣地への南側の光を維持することも近所付き合いが強い場所では大事だと思いました。半地下にすることで北側の隣地の住宅にも変わらない環境を提供できる仕組みにしました。



スケルトンで、構造がありのままの空間がかなり無骨ですが、構造上必要なものを露出しても空間として強いものを心がけています。

場所性から生まれる何をそこに生み出していくかはとても大事だと思っています。やっていることが正しいと言えないかもしれないかもしれませんが、そこに立ったときに馴染む、元々あったかの状態に戻していくことを意識してやっています。

※当記事は、第 15 回建築コンクール「さよなら建築」シンポジウムとして、2023 年 10 月 21 日（土）に行われた内容を要約したものとなっております。　全編は愛知建築士会 名古屋北支部 公式 Youtube チャンネル【しぶチャン】をご覧ください。
https://www.youtube.com/live/YX8HC5pMRZM?si=AEa1yvBS8lltejJM

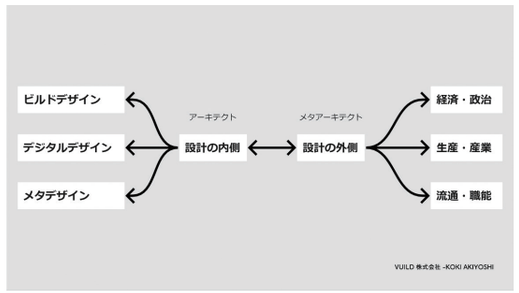


秋吉浩気 建築家メタアーキテクト

VUILD 株式会社 代表取締役CEO
2017年に建築テック系スタートアップVUILDを創業し、「建築の民主化」を目指す。デジタルファブリケーションやソーシャルデザインなど、モノからコトまで幅広いデザイン領域をカバーする。
主な受賞歴にUnder 35 Architects exhibition Gold Medal 賞（2019）、グッドデザイン金賞（2020）、Archi-Neering Design AWARD 最優秀賞（2021）。
主な著書に、『メタアーキテクト―次世代のための建築』
vuild.co.jp/

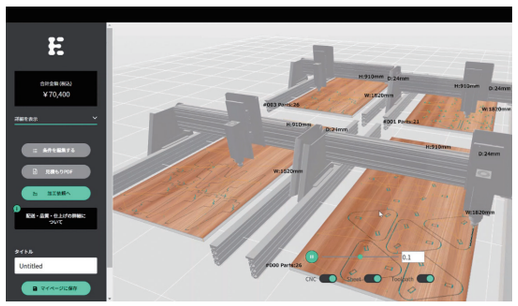
①さよなら「建築学科」

大学入学の頃にTwitterが波及し始め、入学前からTwitterで遊んでいるような時代背景で建築を学びました。情報化が進み最適化された情報が提供されていく中、建築も3Dプリンターが出てきて、新しい領域に入って建築のつくり方から考えられないかと思い大学院に進みました。旧来型のアーキテクトの職能に加え、建築の外側にある制度をデザインするメタアーキテクトという職能をつくり大学院時代から仕事をしてきました。



②さよなら「建築家」

建築家が普段やらなさそうなことをやっていこうと大学院のときに考えました。現在の事業の1つは機械を売ることです。CNCミリングマシンのような機械を導入先の方と一緒に組み立てて配線やデータをつくるところから教えています。建築家がすべてをデザインするのではなく、一般の方が自分で家具や家・建築をつくれるようにするなど人々の創造性を開放することを目的としてサポートする事業をしています。最近ではAIに学習させてコメントを打つような感覚で形をつくり、部品を出力する機械も製作しています。さらに住宅のテンプレート・建築工法も開発して、製造から設計まで仕組みを変えていくことをシステムアーキテクトとして行っています。



③さよなら「近代」

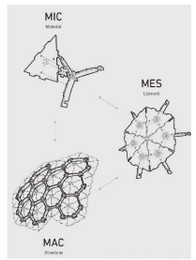
私が初めて建築をつくった「まれびとの家」は富山県南砺市利賀村という限界集落にこの地域の人と組合をつくり、定期的に自分の家の離れだと思って来てくれる場をつくるプロジェクトでした。仕組みは先程の機械を導入し、倒木などを平らな板に挽き、機械で仕口をつくり、参加型で建設しました。デジタル情報化によって生産技術が地域の中に普及し、地域の中にしか生まれ得ない材料や気候風土と応答してその地域にしかできないようなことをつくれるのではと考えたプロジェクトでした。小豆島のプロジェクトでは共同保有している森から木を運んで、皮を剥き、改造したビニールハウスで丸太を乾燥させ、先程の機械で仕口を加工して組み上げています。この流れで山村・離島でも資源を使って地域の中でできることをデジタル技術によって最大化しています。



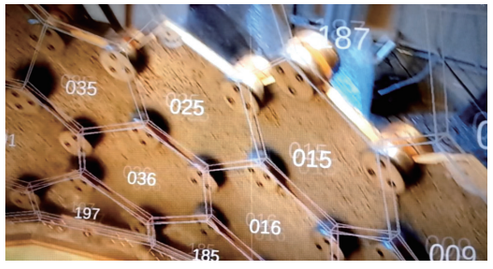
④さよなら「図面」







我々の建築の設計のやり方が3Dで考えるので、3Dの情報を3Dのまま出力してそのまま組み立てています。図面によるコミュニケーションではなく、3Dのままパソコンを見ながら全て違うパーツを番号順に組み立てます。茶室のプロジェクトでは異なる200パーツをホロレンズで現実空間とデジタル空間をミックスさせる手法も使っています。





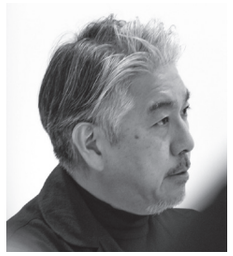
⑤さよなら「計画」

東京学芸大学のプロフェクトではプラン・図面を描くことも”さよなら”しています。当初空調の効いたガラス張り空間を考えましたが、完成されたものを与えると学習がストップするということで、最終的に雨風をしのげる大屋根と製造手段である機械を置いて建築をつくれる方法を覚えてもらうことで進めました。小さな部品を削り出してどこまで大きなものができるのかを学びのテーマとして設定し、部分的につくり試行錯誤することで施工のデザインをして工務店に伝えていきます。プラモデルをつくる感覚で複雑で巨大なものもできるとつかめました。建築のつくり手としてはブルネルスキや棟梁がやっていたことをもう一度デジタル技術を使って挑戦しています。



※当記事は、第15回建築コンクール「さよなら建築」シンポジウムとして、2023年10月21日（土）に行われた内容を要約したものとなっております。　全編は愛知建築士会 名古屋北支部公式 Youtube チャンネル【しぶチャン】をご覧ください。

https://www.youtube.com/live/YX8HC5pMRZM?si=AEa1yvBS8lltejJM



浅井裕雄 建築家

1964 年愛知県生まれ
株式会社国分設計を経て（有）裕建築計画を設立
受賞歴にLIXIL デザインコンテスト銅賞、第6 回JIA 東海住宅建築賞「毛鹿母の家」大賞、
2018 年JIA 優秀建築賞「工場に家」など多数
審査員として、セラミックス・ライフ・デザインアワード、建築学会作品選、JIA 東海住宅建築賞など
時間をテーマにした建築つくりする。
https://www.hello-uu.com/



○最後の砦

両方眺めてみると非常に対局的にいるようにも見えるのですが、真ん中に建築を置いて見てみると、秋吉さんは建築の外側から中に向かって、もしくは両方向横断しているようなつくり方で、松山さんは外に向かって巻き込んでいくという立ち位置がお互いに違っている。建築を中心点に置いた時にどう見ているのでしょうか。
「さようなら」というのは左に様とかいて「左様なら」元々は読んでいたそうで、転じていく起点の話だと思いますが、「建築家が最後の砦」となる起点としての話をお願いします。

・松山さん

さよなら建築家、そこは転換期な気がします。私は建築家が最後の砦と思っているのは、能力が高く、街の風景と対峙しながら美しいものをつくろうと頑張っている人たちがいます。私はその人たちをすごく信頼し、その人たちがつくるものは日本らしさとか失われているものを取り戻そうという気概もあり、そこは最後私たちしかいないのではと思います。だから確率的に街並みがなっていくことに少しでも歯止めをきかせて、何の力にも及ばないかもしれませんが、そういう意識で建築していかないと建築家の未来はないのではと思い最後の砦という言葉にしました。

・秋吉さん

これからもし、デジタル化によって建築がつくられるとなるとデータをつくることに優れた人が最も素晴らしい建築と素晴らしい技術体系をつくっていけるという、ゲームチェンジが起こると思っています。実際にいろんなところへ足を運んでみると、風景のことや歴史のことを含めて活動している方々がおり、増えていける形になるといいと思います。僕は建築のデザインだけじゃなくて、その外側にも活躍できる世の中になるといいと思うし、そういう人たちが増えていくと、フィールドや需要などいろいろな



ものが分散されていき、そこに挑んでいく、そういうところを俯瞰的に見られるのが本来、建築的思考の重要なことであり、それこそが本来建築家がやるべきことだったのかと思います。

中村好文さん・共感する

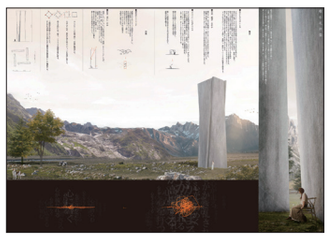
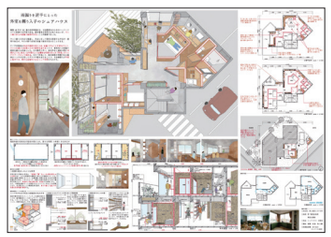


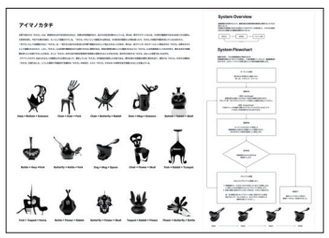
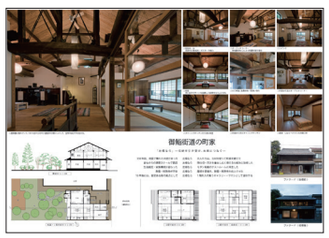
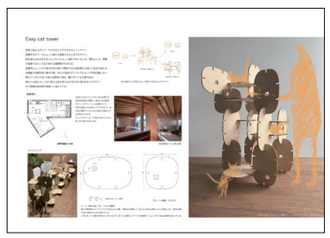
刺激的なプレゼンテーションだったと思います。ある種のプログラムでできていく形というかものが実際見に行ったらどの様に見えるのかが一番興味のあるところで、そういうものでできているのがよく分かります。けれどもその実物の中に自分が入る、あるいは実物を間のあたりにした時に自分がそれをどういう風に感じ、どういう風に評価できるかというのが 1 番興味を持ちました。別の言い方をすると松山さんのはすごく分かりやすくて、自分と同じ世界にいる人だなと感じがしました。建築の発想の仕方とそれを最終的に着地させる方法というのが自分とよく似ているなと同じ穴のむじなという感じがしました。それで秋吉さんから松山さん 20 歳ぐらい違うって言いますけどもさらに僕は 20 歳上になるのですよね。それで思うのですけど秋吉さんたちが、秋吉さんかもしれませんけど、つくっていく建築がこれから先どういう風に主流になっていくかどうか分かりませんけども、どんな風になっていくにしろ、僕や松山さんがやっているような建築が絶えていくとは思えないという気がするのです。例えば今の秋の時期だったら百人一首に「秋風に　たなびく雲の　絶え間より　もれ出づる月の　影のさやけさ」ってすごくいい短歌があります。百人一首読んでいると胸打たれるし、共感するのですよね。ということは 1000 年前の人のものの感じ方と今の我々のものの感じ方はあまり変わってないってことなのですよね。例えばシェイクスピアを読んでもあるところへくれば感極まるっていうことあるわけじゃないですか。つまり人の感覚っていうのはあんまり変わんないと思うのです。建築の感じ方なんかあるいは見え方感じ方もそういう意味であんまり変わらないのかなと僕は考えているのです。フランク・オーウェン・ゲーリーって人は雑誌で見ていると本や写真で見ている時は全然よくわかんなかったというよりはあんまりいいと思ってなかったのですよ。でもビルバオのグッゲンハイム美術館とか、いくつかの彼の実作を見ると結構感動したのです。でつくられ方はとてもコンピューターを駆使したつくられ方である意味で秋吉さんたち秋吉さんがやっているようなことをさらに大きくしたみたいな感じなのですけども、でもそこには今申し上げたような百人一首の世界で我々が感動するようなものが何かそこに、なんて言ったらいいのですかねサムシングって言えばいいのかね何かがある、それはある種のなんていうのかサムシングなそれがあるかどうかが問われるっていう気がするのです。あのゲーリーの作品をしみじみ見て、そうするとそこにプランニングの見事さがちゃんと裏打ちされているっていう、あれはプランニングがすごくいいですよね。でそういうこと。それから松山さん言われたみたいな場のこと。その場のことに対するどうやって答えるべきかみたいな土地柄とか風景とか風土とか。でそれに対するその今までとちょっと違うやり方かもしれませんけど、正解を出しているという気がするのですよね。その 2 つのことは必ずしも対立することではなかったのだなというのを今日お 2 人のプレゼンテーション、シンポジウムを聞きながら感じました。

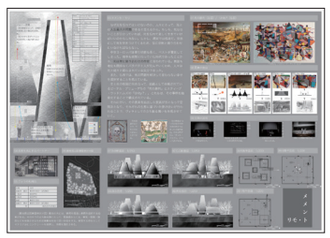
CONCOURS
応募作品紹介

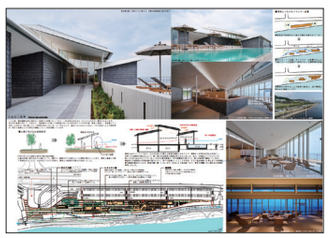
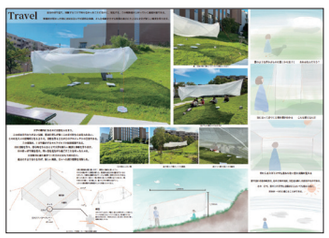
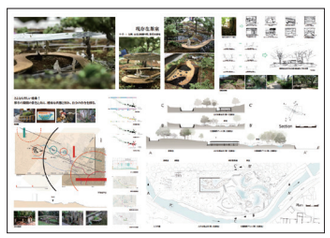
本年度応募作品
全34作品

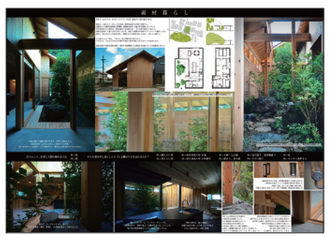


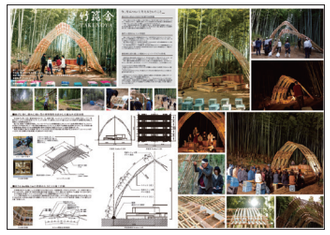
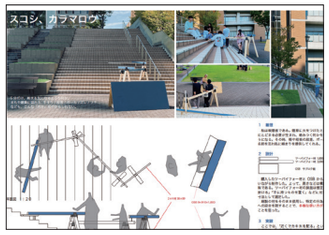




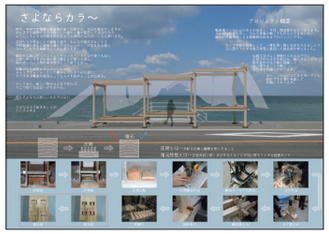
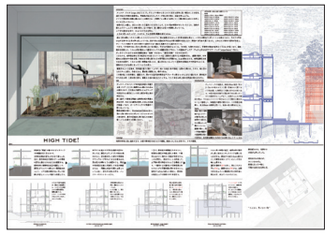




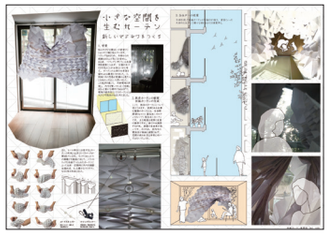
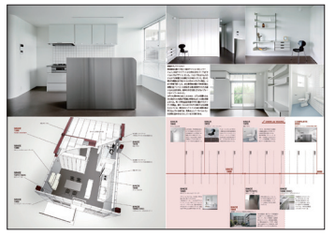
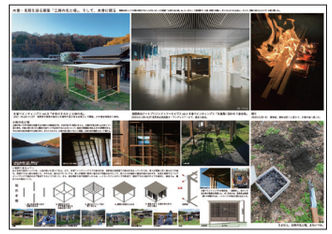






建築コンクールとは

建築の定義を広げるために開催します。
例えば、小さな環境装置のような社会の課題を解決できるモノで人々を幸せにするコトも建築と言っ てもいいのではないか。
建築の意味は、社会や文化の価値環境とともに広がっていきます。
建築コンクールは、毎年提示されるテーマについて、分野を超え、広く作品やアイディアを募集し、 同時に審査員によるシンポジウムを開催、テーマの持つ意味や可能性を深めます。
このコンクールは、お題をもって建築の領域を広く探ります。

CONCOURS



最優秀賞 Sand Architecture

紀平 陸



砂の建築。砂浜を敷地とし、現地の素材とエネルギーを用いる提案。
自然のままではなだらかな砂地が形成されるが、地面に落ちる水を制御することで砂が塊となり形が育っていく。
それは流れの中の淀みとしての構築物。自然の流れの中で構築物を生み、また自然に還っていく。
さよなら計画。さよなら竣工。さよなら建築。

優秀賞 北の大屋根

丹羽 広大



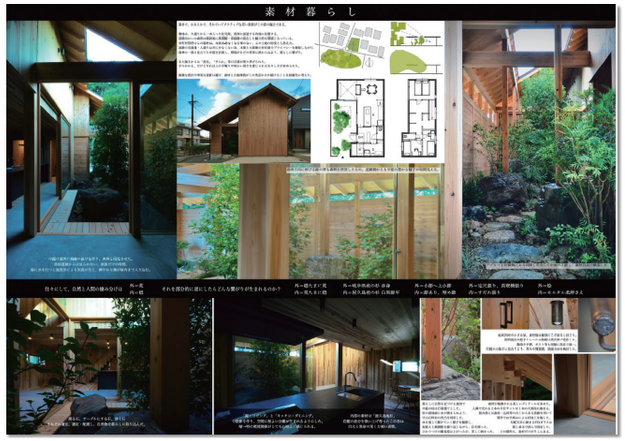
北海道南部の内浦湾に面する豊浦町にある学校の校庭に、3 年生の子どもたちによって建てられた。
自分の背丈よりも大きな空間を、身近から得られる材料を用いて自らの手で創り出せたという経験は、これまでの大人に護られた世界に別れを告げ、自らの足で歩んでいけるという自信に繋がる。

優秀賞 Edited Houses

志磨 純平



物理的空間としての家。ビルディングタイプとしての家。建築家はこれらを設計してきたのではないか。
しかし、家を人が生活を展開させる場の集積と見た時、違う捉え方ができるのではないか。生活を展開させる場の「選び方」をデザインすることで事後的に立ち上がる集積としての家をデザインする。



松山賞

素材暮らし

関谷 涼太

親は、赤ちゃんだった頃の写真を見ては懐かしみ、毎日今が一番可愛いと思い、そして数年先の姿に想いを馳せます。施主が求めたのはそんな情緒的な暮らしです。この家は素材そのものであり、既に様々な変化が見られ始めています。今日のこの姿を、明日見ることはできません。施主は日々、さよならを体験することとなります。



秋吉賞

小出川くるり - 流れの淀みを解す -

服部 瑛斗

放置というマテリアルの流れの中の淀みを生み、使用される居場所がなく、その現状で一生を終えるであろうモノたち。この淀みをほぐし、新しい居場所に辿り着けるシステムを提案します。新しい一時的な居場所となるハブを配置し、流れの管理をデータベースで行うことで、マテリアルの流れを介した人々の互酬を生み出します。



浅井賞

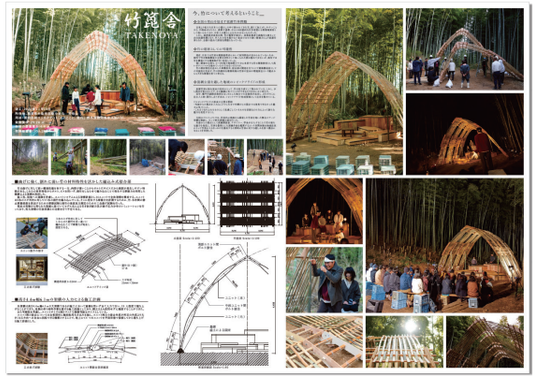
竹篦舎

原 良輔

古来より私たち日本人の暮らしの中で使われてきた竹。日用品はもちろん、農業や漁業、さらには伝統的な日本家屋にも建築用資材として用いられてきたが、時代とともに工業製品へと変わっていった。
建築が地球環境に負荷を与えている今、未利用資材である竹に着目し、建材としての可能性を見出すべきではないだろうか。



佳作



竹篦舎

原良輔



light and dark

松井 大佑

光はいつから明るく焚くことばかりを正としたのだろう。
本作は廃校運営の課題を解きながら、いつのまにか光と闇の物語へと通じ得た。さようならば、ありのままの光や風景を美しく、光のために暗さを。
課題だらけの廃校改修に携わりながら、廃校や改修全般、地球環境の未来の扉を拓くヒントとなるようにと考えた。



妙善寺本堂

柿木 佑介+廣岡 周平+池谷 浩樹

今までの寺院建築は宗教性を高めることを目標に、暗く、地域に対して敷居が高い。その在り方にサヨナラしたい。照り屋根は継承しつつ、現代的な構法で和小屋を再解釈し、明るく、柱が落ちないイベントでも使っていける本堂と、待合室と給湯室がシェアキッチンとなり、機能的にも地域に開かれる日常の中の宗教空間

応募作品リスト

1. 鶴めいホール／平野崇
2.nimbus ／山田寛
3. 町屋の残像／奥田晃輔+堀井達也+吉田裕樹
4. 覗む礼拝堂／向川悠貴
5. 外室を纏う入子のシェアハウス／堀田翔平
6.R2-BIM ／池上晃司
7. アイマノカタチ／阿部和樹●
8. 御鮨街道の町屋／八神崇司
9.Cat tower ／永冶祐太
10. 廊下とアトリエ／葛島隆之●
11. 山に登り、石を積む／丸岡鳴●
12. メメント・モリ - 最後の贈り物 - ／鎌田蓮人●
13. おうち再考／松本清一郎
14. それなら風景／奥田晃輔+堀井達也+吉田裕樹
15.Travel ／松井宏樹●
16. 現存在茶室／ LIN CHIACHI
17. 渋谷のオフィス／上林剛典
18. 素材暮らし／関谷涼太●
19. 北の大屋根／丹羽広大●
20. 小出川くるり／服部瑛斗●
21. シュレッダーされた紙の茶室／久冨敏明●
22.Edited Houses ／志磨純平●
23. 竹箆舎／原良輔●
24. スコシ、カラマロウ／佐村拓海●
25. U邸／松井大佑●
26.light and dark ／松井大佑●
27. 木造在来のゆくえ／南啓史
28. 妙善寺本堂／柿木佑介+廣岡周平+池谷浩樹●
29. さよならカラ〜／岩崎在憲●
30.HIGHTIDE! ／小泉龍之介
31.Sand Architecture ／紀平陸●
32. 小さな空間を生むカーテン／菊地建介
33. 杉並のリノベーション／田中亮平
34.「三時の光と場」／齋藤あずさ

●…1 次投票通過作品

審査

3 票	19	北の大屋根	丹羽広大
2 票	22	Edited Houses	志磨純平
	31	Sand Architecture	紀平陸
1 票	23	竹箆舎	原良輔
	26	light and dark	松井大佑

浅井　これで 3 票入りましたけど北の大屋根。

秋吉　違うというか、どうなのでしょう。確かに最優秀までも少なくとも何らにかには。

浅井　では 2 票もう 1 回見ましょうか。2 票が 19 番と 22 番。あの 2040 何年っていうのは、がっかりしたけど実際に今でもやれるピースが全部あって固まっているという気がして。僕はあの設定の仕方はちょっとおかしいけど、良いのではと思った。

秋吉　僕も 2040 何年はどうかと思いつつも、そのさよなら建築って意味ではその家とか都市とかそういうものを解体して情報技術とかサービスによってまた結合しようとしているところが、さよなら建築という大賞に対して、これがさよなら建築の賞ですと言った時にどれがそうかという 3 つを選びましたが、自分で選ぶならこの 3 つかという感じです。Edited Houses は都市とか住宅みたいなものを解体していることというか、さよならしていること。Sound Architecture は固定化するものとか施工していくとかという様々な建築の常識をこれも計画進行とかそういうものを全部あとは固定しているみたいなものもさよならしているという意味では大事。そのタイトルにはふさわしいなというとこと北の大屋根は大人からのさよならみたいな話もそうなのですけど、すごくいいなと思っている。最終的にこの子供たちがその後どう思ったか心理的な変化がどうあったかの方は結構基本的に興味があって、自立心とか自尊心を建築が構築できるのではないかで言うとここまで込んだ例は見なくすごいと思っている。そういう意味では僕は 3 つの中でも特に北の大屋根は良いのではと思っています。



浅井　22 番は、今すでにやろうと思えばできることと、建築から外れているのは秋吉さんの評価通りで、テーマに合っていること。31 番もこの時間が限定されてくとこで消えたりなくなったりするけど、またすぐ再生できるという意味では、まさにテーマ通りだろうということで僕はこの 22 番と 31 番はどちらかが大賞でも良いと思っています。19 番は、やっていることは素晴らしいし、僕からするとキーワードはさっきの 2 作品と比べると少し弱いけど建築が強いていうところで 3 つの中からすれば少しだけ下というイメージ。

松山　僕はもう再三言っているように、実態というかそこは結構こだわれているので、どちらかいうとこれは秋吉さんと浅井さんと今日こういう 3 名になので、たぶん 19 番、31 番、22 番という 3 つは最優秀賞と優秀賞かなと思います。その中だったら僕は北海道の子供たちがつくったのですね。

秋吉　でも他の 2 つも応援演説を。

松山　もちろん 1 票しか入ってないのですけど、最後は 3 人の票が大事なのでただ少し補足しますと、やっぱり竹は砂と違って労力がかかっていますよね。そこにすごく膨大な時間とその実験と実態があって、説得力がある。バーチャルではなく違うかなと思っているのともう 1 つは、ワンアイデアでここまで世界観を変える建築的建築をつくらなくちゃいけないというところをこの様なアイデアでやるということは、さよなら建築ということも合致すると思います。でも僕は実態ですよね。応援というかコメントしますが、2 票以上入っているところでもそれは異論ありません。

秋吉　その建築が労力とコストがないとできないというところを例えば Sound Architecture と Edited Houses それをなくしているところも含めてさよなら感は強い。

松山　さよなら感は強いよね。

秋吉　改めて今聞いて思ったので、さよなら感は強い。

浅井　相当さよならしていますよ。

秋吉　そういう意味では価値観を揺さぶっている感じはするなって。

浅井　価値観ざわざわするのは、Edited Houses がざわつきます。

松山　ざわつく?あのこれ僕何がいいか全然わかんない。笑

浅井　いやいやこんな暮らしできないなっていう。

松山　これ結局マッチングアアプリじゃないのですか?笑

秋吉　結局マッチングしていますよね?笑

浅井　マッチングしている。笑

松山　マッチングアプリを評価していいのって話。笑

浅井　こういう人こうやって暮らしている人がいたらちょっとうわって。

松山　いいけどさ、これ建築コンクールでマッチングアプリ評価する?

浅井　ざわついています、ざわついている。これ絶対大賞はないってこと?

松山　選んだら建築コンクール、来年大丈夫って勝手なことですけど。あまりにも建築とさよならし過ぎ。

[笑い]

浅井　Sound Architecture なら良いとか良い?

松山　これは良いと思う。これは良い。

浅井　なんで忖度しないといけない。

松山　これはできそうだし、さっき「さよなら感が出ている」という意味では納得した。

浅井　本当に?

秋吉　そう労力もコストもいらないですからね。

松山　そう。それをこう排除しているってのは少しむかつくんだけど、でもそことそこを排除しているってとこが、この案の凄みだろうしね。

浅井　僕、大賞にして良い?

松山　良い。

秋吉　北の大屋根はいいですか。

松山　2 人は大賞にしたいのでしょ?

秋吉　僕はどっちでも。どっちでもって言ったらどっでも良いですか。評価軸が難しいですね。でも確かにおっしゃるように北の大屋根は「さよなら感」は Sound Architecture と比べられちゃうとですけど。

浅井さん 1 つお知らせがあります。栗生はるかさんからメッセージが来ました。

【栗生はるか】
本日は参加できず恐縮ですテーマ設定に関わらせていただいた栗生はるかです。審査員の先生方からもあったように私も割と思い切った既存の建築の枠組からの「さよなら」を当初イメージしておりました。ですので意外と現状の建築に寄り添う案が多くて意外でした。一見結びつかないような作品でもそれぞれの「さよなら」の意図があるように読み込めて面白かったです。「さよなら」の読み込みが人それぞれで落とされたものの中にも「さよなら」を感じたものもあれば、審査の先生方の指摘でなるほどと思ったものもあり、選ばれている作品の数々共感しました。私が現地にいたらやはり松山さんと戦っていた気がします。

松山　ちょっと 1 つだけいいですかごめんなさい。あのちょっとその関係者いますよね。ちょっとコメントを 1 個聞きたいです。この作品のこうさよなら感って何ですか?

会場　僕は先ほど秋吉さんがおっしゃっていたように子供たちの心境がどうかというところが気になるとおっしゃってくださいましたが、僕も実際小学校 3 年生の時にこの授業を受けました。その当時思った自分の背丈よりも大きなものを大人の力を借りてですけど、つくり出したことによってその物づくりへの価値観みたいなものが結構大きく変わりました。そのことを思い出しながら今回のテーマに寄せていったというか、こういう切り口が 1 番僕の中ではしっくりくるなっていうことで描きました。僕の中ではどちらかというと建築的、先ほど浅井さんが今の建築は柱が見えなかったり土が見えなかったりするから、そういうものからのさよならというコメントをいだいた時に、そういうことも面白いなとは思いました。けど僕の中ではやっぱ子供たちの心境っていうところが一番大きいです。

秋吉　心境がさよならしていると。

会場　さよならというのは成長というか現状その今まで自分がつくれるつくれないと思っていたものがつくれたことによって今までの自分とさよならするというか。



松山　最後もう 1 つだけ。これ大賞になったら賞金出ますよね。賞金をどう使います?

秋吉　それすごくいい質問です。

松山　賞金があの子供たち還元されるのかどうか。

会場　もちろんそうしたいと思います。そもそも予算があるカリキュラムではないので、もっと質の良いものにしていける。それを使って還元していきたいなと思います。

秋吉　今の質問すごく良くて、それ聞くと Sound Architecture に 20 万あげたいなって思いましたね。来年この場であの実作をパフォーマンスしてほしいです。

松山　それを条件に最優秀にする?

浅井　いいよ。いいの?

松山　でも多数決でいいですよ。プレゼンテーションというか今の自分からさよならするというそこは違う言葉だったらね。要は秋吉さんと浅井さんを説得してほしいわけですよ。やっぱりだからそこは押えない感じはあるので。Sound Architecture でいきますか。

秋吉　僕は 20 万ここに投資したいです。

松山　あの投資したいってことで。

浅井　Sound Architecture を最優秀賞条件付きで。

総評

浅井裕雄さん



色々出展していただいた方々お疲れ様でした。ありがとうございました。難しいテーマでさっき栗生はるかさんもテーマのことを言ってくれたのですが、やはり秋吉さんが言った通り、その「さよなら」というテーマに対して、その事象が遠くへ行っているかどうかということがポイントだったのかなという気がします。そういう意味ではこの言葉に対して色々考えさせられて、良いコンテストになったのかなと思っております。急遽、審査員が変わりまして皆さんにはご迷惑かけましたが、ありがとうございました。

秋吉浩気さん



招きいただきありがとうございました。たぶん来年から普通に戻ると思いますが、ここの「さよなら」と書いてあるからには今までにない価値観のものを選んだ方がいいのではという意味では、最後選ばれたものは「さよなら建築」と表題がついていても、確かにと外部で見た人も思うのではというものが選ばれたような気がしています。今年も去年も全国の卒業設計の審査員を行ったのですが、仕組みとか情報アーキテクチャーのような提案がありますが、なかなか評価されない。「さよなら建築」といったテーマだとようやくそういうものが出してこられる。そういう意味で最終的に値するものが選ばれたのではと思っていたので、私もすごく楽しかったです。ありがとうございました。

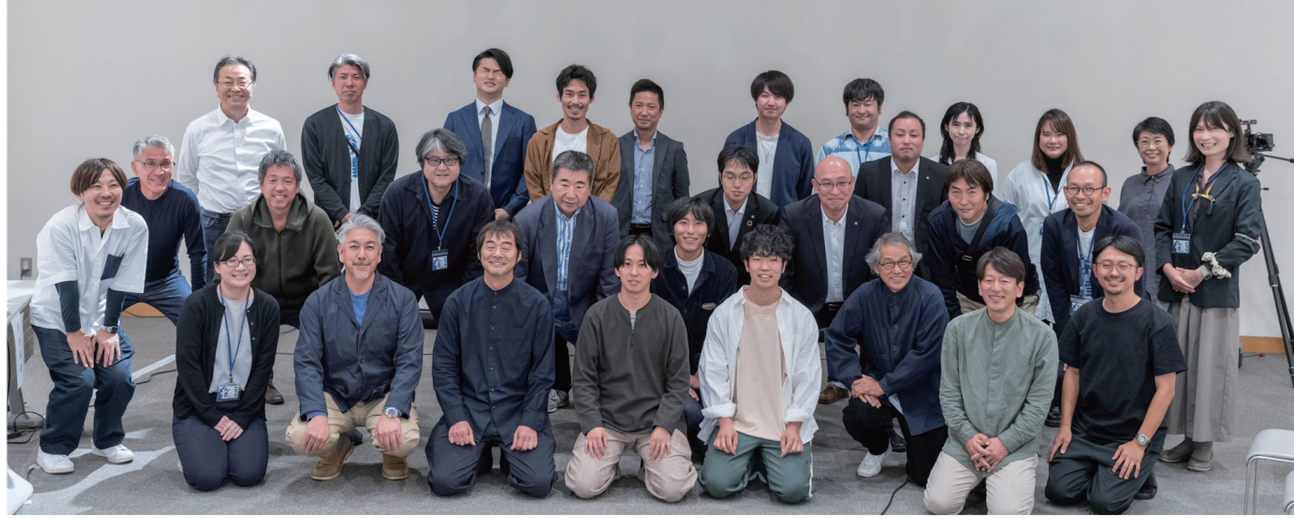
松山将勝さん



長時間お付き合いいただきありがとうございます。難しかったですね。栗生はるかさんが設定したテーマだったのですが。今日こうして建築家３名が集まっているわけで、どちらかというと秋吉さんは活動と建築家を横断しているようなタイプ、私は建築家のもう建築家でしかない人間、もう一人ナガオカケンメイさんみたいな建築でもない視点の人がいると、このコンクールの審査員の持ち味で面白かったなと思います。建築家の目線でいくと選ぶものと選ばないものが変わってきますが、それを今日浅井さんがケンメイさんの役割を担うというか浅井さんがそれを違う視点で切り込んでいったというところで、今日は「さよなら建築」というテーマにあった最終的な作品が選出されたと思っています。そういう意味では個人的にはフラストレーションがありますけど、すごく納得した納得できる審査会でした。ありがとうございました。去年も含めて、本当に素敵なコンペになっていくんじゃないかなと思います。
どうもありがとうございました。







協賛企業挨拶 ※ご本人不在のため実行委員が代理



今回も目録といたしまして旭化成建材株式会社様から最優秀賞賞金 20 万円をいただいております。ありがとうございます。
Sand Architecture ／紀平さんおめでとうございます。

愛知建築士会会長挨拶　濱田会長



今日は皆さんご参加いただきましてありがとうございます。また松山先生、秋吉先生、お疲れ様でした。ありがとうございました。最後に挨拶をしてくださいということで、僕なりにも「さよなら」って何だろうと思いながら考えていたのですが、やはり時間だったり、思想的なところだったり、きっとそんなところなのかなと思いつつ、今日の審査過程を見ていました。脱構築的なのだろうなと思いながらも、でもそこの先に多分行く。先ほど秋吉さんがおっしゃっていた様な先に行く様なところが求められていたのだと改めて気付かされ、とても楽しい時間を過ごすことができました。自分も勉強になったと思います。今日は皆さんありがとうございました。お疲れ様でした。

協賛／

AsahiKASEI 旭化成建材
kitchenhouse
株式会社ユニソン
葉っぱの世紀のはじまり。ユダホ工株式会社
雨のみちをデザインする Tanita Housing Ware
株式会社確認サービス
KY. TILE
あなたの「夢」応援します。日建学院
株式会社加藤設計
誠和建設株式会社 SEIWA
HC.Home's
ARAI GUMI
阿部建設株式会社
めざせ！土木の達人 新都工業株式会社

後援／愛知県、名古屋市、（株）中日新聞社、（公社）日本建築士会連合会、（公社）愛知建築士会、
（公社）愛知県建築士事務所協会、（公社）日本建築家協会東海支部愛知地域会、（株）中部経済新聞社

公益社団法人
愛知建築士会 名古屋北支部

現状に　とどまることも、もどることも、はなれることもできる。

とどまることができるのであるならばそのままで良いかもしれない。
もどることができるならば戻るのもありかもしれない。

ただ、もしも現状を受け入れ“さようならば”と、
動き出せば新しい場所へたどり着けるかもしれない。

さよなら建築を募集します。

さようなら　【然様・左様なら】《感》(元来、接続詞で、「それならば」の意)別れの挨拶語。
さよなら。　—— 広辞苑　第7版　新村出 編　岩波書店

製作・発行
公益社団法人　愛知建築士会名古屋北支部
第15回建築コンクール「さよなら建築」2025年　1月発行
https://www.asa758kita.jp/
https://kenchiku-concours-758n.org/
【しぶチャン】　【コンクールHP】
第15回建築コンクール「さよなら建築」冊子編集委員／鴻池慎二・寺田響(学生会員)・長尾正誠・松浦和正
撮影協力／ToLoLo studio　デザイン・編集／souvenir